

73. 日本人乳齒期男女児の皮膚の色と衣服の色の 適応色について

東京家政大 木曾山かね

1. 乳齒期前後期における男女児の肌色を視感測定により、実際に把握し、衣服の色を求める資料とし、更に求めたその適応色と皮膚の色との関係が色彩理論からみてどのような関係にあるか考察し、被服デザインの根拠にすることを目的とした。

2. 被験者は男女園児 200人、測定時期は昭和34年及び35年6月、温度 $25^{\circ}\text{C}\sim 27^{\circ}$ 、湿度 $55\%\sim 70\%$ の間において行った。測定箇所は額、ほほ、あご及び腕の外側を計測した。適応色の求め方は基礎実験により、えらんだ46色の色布を園児の肩胸の周辺にかけて、5人の観察者がこれをえらんだ。色布の色は標準光源下に於て、比色器を用いて、等色の色紙を求め、ない場合は複元して地合に左右されずに色のみを対象とするようにして、その分光反射率曲線を取り、その二色の関係をみる資料とした。

3. 皮膚の色で最も多かったのは7色でマンセル色票に合わせれば、5.0YR6/4周辺の色群を中心に10.0YR7/2, 7.5YR6/2, 2.5YR5/4等の色である。この色群に対応する色は719色あり、分類すると21色で色相別にみると有彩色群、5Y7/8を最高に2.5BG3/2, 10.0B8/4, 5.0R8/6, 10.0RP4/12等が多くみられ、W. B. G等の無彩色群がこれにつづいて、彩度のひくい低明度高明度のものが多くみられた。